

〈書評〉

Sarah Azaransky (ed.), *Religion and Politics in America's Borderlands* (Lanham : Lexington Books, 2013)

大久保 教 宏

序章 (Introduction) の他に3部9章に分かれる本書の各章と執筆者は以下のとおりである。

Introduction : The Border and the Borderlands Sarah Azaransky

I. The Borderlands as a Religious Resource

1. Immigration and Some of Its Implications for Christian Identity and Doctrine Orlando O. Espín

2. Alternately Documented Theologies : Mapping Border, Exile and Diaspora Carmen M. Nanko-Fernández

3. How to Shape Christian Perspectives on Immigration? : Strategies for Communicating Biblical Teaching M. Daniel Carroll R.

II. The Borderlands as a Political and Religious Reality

4. Borderlife and the Religious Imagination Daisy L. Machado

5. A Tour of the Border in San Diego : Militarization of the Line and Criminalization of Immigrants Pedro Rios

6. Spiritualities of Social Engagement : Women Resisting Violence in Mexico and Honduras Monica A. Maher

III. The Borderlands as a Call to Action

7. The Subversive Act of Breaking Bread: How the Eucharist Transforms the Immigration Conversation Craig Wong
8. A Divided Friendship: Friendship Park: The Past, Present, and Future of the U.S.-Mexico Border John Fanestil
9. Vicissitudes of the Margins: An HIV/AIDS Theological Journey Ángel F. Méndez Montoya

本書は、米墨国境や移民の問題をめぐるキリスト教内での動きを、様々な事例を紹介しながら分析する論集である。それらの事例のほとんどは今世紀に入ってから顕在化したものであり、社会においても研究の場においても、まださほど知られたものではない。もちろん、日本でも紹介されたことがない事例ばかりであろうから、南北アメリカにおける最新のキリスト教の動向を知る重要な手掛かりとなる書といえる。執筆陣は研究者の他、実際に現場で活動する聖職者や信者が多く含まれており、また、スペイン語名を持つ執筆者が並んでいることが示唆しているように、大部分の執筆者が米国のヒスパニック系移民やラテンアメリカ人である。各執筆者が自分自身の問題として展開する議論は臨場感にあふれている。

ところで、書名には「宗教」、「政治」、「アメリカ」、「国境地帯」と4つの名詞が並んでいるが、副題もないので、最初の2つの名詞から、宗教と政治というよくある組み合わせの議論の本と思われるかもしれない。しかし、本書を読んでみると2つの点で意外な展開を見せる。第一に、宗教と政治に関する議論といえ、どちらかという政治の場に宗教的要素（教え、シンボル、聖職者、宗教組織など）が介在したがゆえの両者の緊張、特に政治の側の緊張に焦点が置かれる傾向にある。ところが、本書は宗教に政治的要素がいかん緊張をもたらしたかに主眼がある。そして、その緊張のなかで宗教がいかなる政治的な意味を持つ活動を展開するかが語られ、そのような活動にいたる宗教的な論理が明らかにされる。つまり、本書の関心はあくまでも宗教側の活動や論理にあり、政治の側が宗教からい

かなる影響を受け、どのような対応をしたかまではカバーしていない。第二に、宗教に緊張を与えたその政治的要素とは、政治的意図により引かれた国境であり、その周囲に広がる国境地帯であり、国境が引かれたがゆえに生じる移民であり、移民をめぐる移民政策である。宗教に影響を与える政治的要素を網羅的に捉えようとしているわけではない。ゆえに、書名に並んだ4つの名詞のうち、鍵となる言葉は、「宗教」と「国境地帯」であったことがわかる。ならば、この2語が強調されるような書名のほうがよかったのではないかと感じる。

さらに言えば、ここで「宗教」という言葉が使われることにも多少の疑問を感じる。本書でいう宗教とはもっぱらキリスト教のことだ。例外は第4章で取り上げられるクランデリスモ（神癒）であるが、それとて、キリスト教と何らかの習合関係があり、広義のキリスト教の範囲内に入るものと捉えることは可能である。「政治」の対概念として「宗教」という言葉を使ったのかもしれないが、本書の主題は、国境や国境地帯の存在、意味が南北アメリカのキリスト教にかなる影響を及ぼし、それに対してキリスト教がかなる反応を示しているかである。ならば、書名にもストレートにキリスト教という言葉を用いてくれれば、よりの確に本書の内容を表す書名となったのではないか。書名について揚げ足を取りすぎたかもしれないが、私はけっして本書の価値を貶めようとしているのではなく、むしろその逆で、内容的には斬新で刺激的な問題を扱っている書と評価できる。そのことが書名から伝わってこないことが残念なのである。

では、そもそもなぜ「国境地帯」なのか。キリスト教は世界各地に広まる途上で、予期せぬ新たな問題に直面し、そのたびに思想面、実践面、制度面での変革を遂げてきた。南北アメリカにおいても、まずは征服者とともにやってきたカトリック神父が先住民と出会い、先住民は宣教対象となるのか、宣教対象であるのならいかに宣教すべきか、彼らがもともと持っている宗教や文化はどうするかといった省察を繰り返し、新たな神学的解釈や宣教戦略を生み出していった。あるいは、20世紀半ばには、都市周辺

のスラム化や権威主義的な政治体制の出現に直面して、政治的、経済的下層に置かれた人々の解放を目指す解放の神学が登場した。では、21世紀の南北アメリカのキリスト教はいかなる問題に直面しているのか。その問題はいくつかあるであろうが、本書を読むと、特に国境地帯や移民に関わる問題が重要なものとなっていることがわかる。

本書の説明によれば、1994年のNAFTA発効を一つの契機として、米国側による米墨国境の警備方法が、従来は不法越境者の逮捕を中心としていたのが、国境に壁を築き、不法な越境を物理的に阻止するやり方変わった。その結果、多くの者が国境を越えられず、メキシコ側の砂漠や山中をさまよって行き倒れとなったり、あるいは国境の川で溺死するなど、国境での死者の数は1995年から2005年の間で2倍になったという。非合法移民が公共サービスを受けられなくなる法案がカリフォルニア州で可決されたのも1994年のことである。これら国境や移民をめぐる非人道的な政策や社会的な差別を前にして、国境周辺で活動するキリスト教も対応を迫られている。また、米国のカトリック信者の半分、ペンテコステ派信者の3分の1をヒスパニックが占めるようになった。「国境地帯」は政治的、社会的に深刻な問題であるだけでなく、キリスト教の内部においても重要な問題となっていると本書は説く。

第1部の3つの章は、そのような問題を、キリスト教の神学や聖書解釈学がどのように捉えつつあるかに焦点を当てる。まず第1章は、たとえば移民を促進するグローバル化といった時代の状況に合わせた新しい教会論を構築するために、移民の神学 (theology of immigration) を導き出す必要があるとする。その理由は、普遍主義を標榜するキリスト教は移民を問題化することなく普遍的でありえるのか、といった問いが発せられることにあり、その問いは倫理的、あるいは司牧上の方法論的問いにとどまるのではなく、神学的な問いであるべきだと説明する。続く第2章は、そのようにして生まれた神学の具体像により迫っていく。一口に移民といっても、実際には移動していないのに国境の線引きによって移民にされてし

まった国境周辺の人々（たとえばカリフォルニアやアリゾナのメキシコ人）、政治的理由で米国に渡った亡命者（たとえばキューバ人）、米国植民地出身の市民というあいまいな立場で国境を往来し米国内に拡散するディアスポラの民（たとえばプエルトリコ人）とでは移民の体験は異なり、それぞれの体験によって生じてくる神学の傾向も異なるという。さらに第3章では、キリスト教が移民を重視する聖書的な根拠が説明される。イエスも旧約聖書の主要な登場人物（アブラハム、ヨセフ、ルツら）も異国に移住した経験を持ち、旧約聖書は異国からの逗留者を搾取することを禁じ、新約聖書にはキリスト者は神の国に向かう移民であるとのメタファーがある、といった具合である。第1部は、以上のような論理により移民を重視するキリスト教神学の潮流が生じつつあることを明らかにする。

第1部を読んだ読者は、いくつかのことに気付くであろう。まず、引用される神学者や聖書解釈学者がほぼ例外なくヒスパニックであることから、移民の神学とはヒスパニック系移民自身の手による神学であることがわかる。征服期のカトリック神父や解放の神学の論者たちにとって、相対した先住民や貧者は他者であり、最大の関心事は先住民をキリスト教徒化すること、貧者をより強固にカトリック教会の管轄下に置くことにあった。これに対して、移民の神学の関心は、他者としての移民のキリスト教徒化にはなく（移民はすでにキリスト教徒化しているとの前提に立っている）、逆にキリスト教徒とはメタファー上すべて移民であるとキリスト教徒たちに気付かせることにある。裏を返せば、それだけ、移民問題に無関心なキリスト教徒が多いということなのであろう。

また、読者はこの神学がカトリックの神学なのかプロテスタントの神学なのかが気になるかもしれない。だが、本書では、引用される神学者や聖書解釈学者たちがカトリックなのかプロテスタントなのかは必ずしも明らかにされてはいない。第2部、第3部も含めて、カトリックとプロテスタントの神学的、方法的違いを明らかにすることに本書の関心はないのである。このことは、近年の南北アメリカにおいては、神学のみならず社会科

学や人文科学の場でも、カトリックのみ、あるいはプロテスタントのみを取り上げることが少なくなっていることと連動している。プロテスタントの論者もいるにもかかわらず、解放の神学がカトリックの神学として一般的に認知されるのは、解放の神学が台頭した時代のラテンアメリカにおいては圧倒的にカトリックの影響力のほうが強かったからであろう。その時代から半世紀が過ぎ、すでに米墨国境のどちら側においてもカトリックとプロテスタントの信者数は拮抗しつつある。南から来た移民がカトリック信者であるとは限らないのだ。また、かつては主に社会の下層から信者を集めていたペンテコステ派は、現在では中層、上層にも信者を獲得し、社会全体に広く影響を及ぼしている。さらに、先住民や黒人の宗教との習合が、カトリックだけでなくプロテスタントでも見られるようになった。すなわち、カトリックとプロテスタントとで、行使する社会的影響力、直面する問題において、大きな違いがなくなりつつある。両者の神学や活動に多くの共通点が生じるようになったとしても不思議なことではない。このように、共通点が多くなってきたカトリックとプロテスタントをことさら分けて論じることの意味が以前に比べて薄くなってきており、第1章や第3章のタイトルに見られるように、あえて両者を区別しない概念として「キリスト教」という言葉が使われることが多くなっている（この意味でも、本書の書名に「キリスト教」の言葉が使われたほうがよかったように思う）。

第2部は、国境地帯の政治的状況において、いかなる信仰や宗教的実践、活動が行われているかを扱いつつ、それらがどのような政治的意味を持つかを検証する。第4章は、クランデリスモ、テキサス州サンファン・デル・バジェの聖母、グアダルーペの聖母などを具体例として挙げ、メキシコ側から国境を越え、米国に定着した宗教的要素の特徴について考察する。いずれも、米国で重労働に就き、様々な差別を受けるメキシコ人の、移民としての過酷な境遇に癒しを与えるという新たな役割を付されているが、新たな役割はそれだけではない。米国側でも特に大規模化しているの

がグアダルーペの聖母信仰である。2002年以降、メキシコ市のグアダルーペのバシリカからニューヨークまでリレーをする行事が催されるようになり、数万人の参加者を見るほどに発展したが、この行事はメキシコ人移民の霊的アイデンティティや移民コミュニティの紐帯を強め、支配的な米国文化の人種的ハイアラーキーに対する拒否の表明ともなっているという。このような事例から、国境地帯が抱える問題は米墨国境周辺地域にのみ固有なものではなく、ニューヨークのようにヒスパニックの文化や宗教が入り込んだ地も含まれると、この章の執筆者は主張する。これとは逆に第6章は、国境地帯の問題がメキシコ、さらには米墨国境から遠く離れたホンジュラスにまで波及していると説く。ホンジュラスではかつてバナナ企業が君臨し、最近ではマキラドーラや中米で最大級の米軍基地が作られ、2009年のクーデタの首謀者たちは米国の軍事学校で訓練を受けた者であるなど、この国は常に米国からの強力な影響の下に置かれてきた。ホンジュラス、そして同様の状況下にあるメキシコ北部では、近年、治安の極端な悪化が伝えられるが、特に女性を標的にした殺人事件が頻発しているという。これに女性自身が抗議する運動が現れてきており、そのいくつかは、巡礼のごとく行進し、祈りを捧げ、十字架を掲げるなど、伝統的なキリスト教的実践を自由に再解釈して実行する信仰集団である。これらの実践や信仰が、殺人や治安悪化という苛烈な状況に対処するためのエネルギーや確信を女性たちに与えているのである。第5章では、米国キリスト友会(クエーカー)の米墨国境プログラムが、国境の状況を人々に知らせるために行っている国境ツアーが紹介されるが、これも、国境地帯という特殊な状況に対する宗教集団による一つの抵抗手段として捉えられよう。

第5章、第6章は、執筆者自身も携わる活動を取り上げたものであるが、第3部では、執筆者自身のより個人的な体験が示され、宗教的なメタファーや活動に訴えかけながら、国境やそれと関連付けられた様々な境界による分断を調停しようとする論理展開が検証される。第7章の執筆者は19世紀末に米国に移民した祖父を持つ中国系米国人であり、祖父の代から

長らく差別や偏見を体験してきた。彼はサンフランシスコの福音派教会に属しているが、その教会には世界各地からの移民が訪れる。なかでもメキシコ、中米諸国からの移民が多いのだが、彼はそれらの移民との出会いを通して、国境の問題が中国系と米国社会の間にのみあるのではなく、より普遍的な問題であることを認識する。その一方で、比較的豊かな中国系移民と貧しいヒスパニックとの間にも境界があることに気づき、これらの境界を越えるために、国籍や階級の区別なく同じ食卓を囲むキリスト教の聖餐のメタファーを掲げる。第8章は、このような機能を果たす聖餐を、メタファーの次元にとどまらず、実際に行う試みが紹介される。米墨国境の西端の岬には米墨国境起源の地としての記念碑が建てられ、周囲は「友好公園」として整備されているが、その公園にも国境に沿ってフェンスが設けられている。米国側のメソジスト牧師であるこの章の執筆者は、この公園で聖餐式を執り行い、フェンス越しにメキシコ側の信者にもパンを分かち与えた。この行為は税関法上の違反になるなどで当局から禁止されたが、それを無視して週1度の聖餐を続けたところ、ついには国境警備隊の実力行使によって阻止されてしまう。国境警備隊と衝突してまで国境越しに聖餐を続ける試みには、キリスト教の普遍主義的な要求と国境を作り出す国民国家の要求との鋭い対置が見られるという。キリスト教と国境の対置という問題意識は第9章にも引き継がれる。第9章の執筆者は米墨国境に近いメヒカリ生まれのメキシコ人で、子供のころにゲイであることに気づき、それを振り払うためにメキシコ市のドミニコ会修道院に入った。その後、米国の大学の博士課程に留学するために居住申請を出した際、検査でHIV感染者であることが判明し、米国入国を拒否される。メキシコ人であること、ゲイであること、HIV感染者であることといった二重、三重の境界線を張りめぐらされた執筆者は、境界線を引くことで他者を作り支配するのは植民地主義的な発想、手段であると批判する。彼は、人間と神の間にも境界があるが、神が人間の姿となって人間を愛し歓迎するという考えで、このような境界を克服しようとする。

以上、本書の内容を概観してきたが、南北アメリカのキリスト教内で国境や移民の問題が神学的な考察の対象にも昇華し、様々な動きを生み出していることを明確に教えてくれる書である。本書はこのテーマを扱う書としてはパイオニアであり、また、執筆者に現場での活動家も多いこともあってか、まだまだ分析よりも事例の紹介に重きが置かれているとの印象もある。今後、後続の研究がさらに分析を深めていくことが期待される。一点、方向性を挙げるとすれば、これらの動きがキリスト教内外の他の動きとどのような影響関係にあるかについては、本書では多少の言及が散見される程度なので、よりいっそうの解明を期待したい。たとえば、同じように国境を相対化し、植民地主義を批判するヒスパニックの思想家、文学者、芸術家たちとの連動はいかほどなのだろうか。為政者たちの反応も気になる。キリスト教内部でもアジア、アフリカなど他地域からの移民とはどのような関係にあるのか。そして何より、移民を受け入れ、暴力を否定するキリスト教があるのに対し、移民を拒む米国社会や、殺人やクーデタを許容してしまうラテンアメリカ社会もまたキリスト教社会である。移民や暴力の問題に組織としてのキリスト教会の反応は鈍いとの指摘も、本書にはたびたびある。歴史上繰り返されてきた古いキリスト教と新しいキリスト教との摩擦が、ここにも生じているようだ。しかし、本書で扱われた新しい神学や活動は、キリスト教会全体、キリスト教社会全体のなかでいかほどのインパクトがあるのだろうか。カトリックとプロテスタントの境界があいまいになる一方で、国境をはじめとする境界問題への対応の仕方こそが21世紀のキリスト教を分断する新たな境界となり、それを越えていくことが、南北アメリカのキリスト教の大きな課題となっていくのかもしれない。そうであるなら、本書で取り上げられた問題の重要性は決して小さくないであろう。